

《原 著》

# 急性心筋梗塞における $^{201}\text{Tl}/^{123}\text{I}$ -BMIPP Dual SPECT 心筋シンチグラムの経時的変化； とくに慢性期乖離現象の意義について

岩沢 博人\*    阿部 正宏\*    阿部 敏弘\*    永井 義一\*  
伊吹山千春\*

\* 東京医科大学内科学第二講座

要旨 本研究は急性心筋梗塞での TL と BMIPP の集積乖離の経時的変化とその臨床的意義を明らかにすることを目的とした。再灌流された急性心筋梗塞 46 例を対象に TL/BMIPP Dual SPECT 心筋シンチグラムを 1 か月、3 か月および 6 か月に施行した。左室造影は再灌流直後、1 か月および 6 か月に施行し、梗塞部長径短縮率と左室拡張末期容積係数 (LVEDVI) を算出した。発症 1 か月でのシンチグラムで乖離のないものを (-) 群、乖離を認めた例ではその持続期間により 1 か月のみ；1M 群、3 か月まで；3M 群、6 か月まで；6M 群に亜分類した。結果、1M 群および 3M 群の梗塞部壁運動は 1 か月で改善が認められたが、6M 群では 6 か月でも不変であった。また 6 か月の LVEDVI は 1M 群および 3M 群で不変なのに対し、6M 群では有意に大であった。再灌流された急性心筋梗塞において比較的早期に消失する乖離は、stunned myocardium の存在を表現し、遷延する乖離の一因として左室リモデリングが示唆された。

(核医学 36: 349-355, 1999)